留萌いま・むかし　第66話

ルルモッペの逸話 3

（松浦武四郎の近世蝦夷人物史）

孝女ヌイタレの事2

人目には父娘のような夫婦に見えたが、ヌイタレはそれを嫌がらずに、コシカ幼く、養うのに苦労した。自分がこの家に来てからでも、母にも弟にも妹にも古着を着せ、村一番の貧乏と言われ、飢えにも耐えて、

も心のやさしい人で、ヌイタレを愛し、仲睦まじく暮らした。そして、母親の面倒も良く見たのだった。コシカは「以前は、弟も妹も何とか命を保ってきた。しかし、今では、人並の生活をし、母にも充分なことをしてあげれるようになった。」というようになった。

弟、妹が成長するにつれ、家も栄え、苦労した時のことが今になって少しづつ他の人にも知られるようになった。

当時のルルモッペ支配人は、南部大畑の出身で四郎兵衛という人であった。長年この地に勤めていたので、村の人たちが自分の子供のように思えて、いつもそのように言っていた。ヌイタレの家族が貧乏で苦労している間も一日二日おきに米や味噌などを、夜が更けてから人目を忍んで差し入れた。

四郎兵衛は「主人の耳に入ると困るので、絶対この事を話してはならない。」と固く口どめしていた。しかし、今になって、誰ともなく知れ渡り、四郎兵衛は「人の世話こそ、人の目に付くようにするものでない。人の目に付くようにするのは、自分が目立ちたいためすることである。」と答えたとか。

この良い例として、今年の春のことだったか、一人暮らしの者が、この地ルルモッペにいたが、長く煩って誰も介抱する人がなかった。その時、四郎兵衛は毎日食事を届け世話をしたそうだ。その事が金井というお役人の耳に入り、「どうして、長く病気をしていることを届けなかったのか。」と尋ねられた。すると四郎兵衛は「届け出ると、御役所より米一斗五升をいただけるけど、それだけで何も介抱してくれない。それならば、私ができることをしてやって養生させた方が良い。」と答えたという。

四郎兵衛は、何度かこのように世話をしたことがあると聞いている。この四郎兵衛という者は実に奇特な人である。

福士広志
海のふるさと館学芸係長